

家事根源集釋

下

如

冊一	第	一	第	一
數部	部	部	部	部
	三	三	三	三
	八	八	八	八
	日	日	日	日
三	號	號	號	號

滋賀縣立膳所中學校

如

1353
vol 3

○神祇令云春夏鎮火

祭季冬鎮火祭義解謂

在官城四方外角下部

等鎮火而祭備防火災

故曰鎮火○儀式詳也

○延喜式有鎮火祭祀

詞

○神祇令云季夏道饗

祭季冬道饗祭義解謂

下部等於京城四隅道

上而祭之言欲令鬼魅

自外來者不敢入京師

故預進於路而饗道也

○疫癘流布時被行四

角四境鬼氣祭對治見

東鑑二十六

京城四角 官城四角四

堀 和途堀 會坂堀

大枝堀 山崎堀

四所ノ鬼氣ヲ祭爲

百五

鎮火祭

同日

下部氏乃人火と云らるる京城乃四の

と云りて宗事乃火災を御守り

此た免と云は祭終乃あひと祓納

同くゆらるる御守なり

道饗祭

同日

是の疫癘の祭なり毎季小太のり

廻江軍也を此の終くゆらるる

部の人京城の四角に路して鬼魅

方より身とらると京師よ入る

陰陽寮ノ人々此四角
四界(遣ハル)也朝野
羣載第十五ニリ

○西宮記九条殿
年中行事ニ京手於愛
宕寺給之北手於右近
馬場給之西手於右兵
衛馬場給之云又人數
非米鹽文ニ枚官勅作
之

○月令仲春之月是月
也日夜分雷乃發聲仲
秋之月是月也日夜分
雷始收聲

西宮抄六

雷鳴陣 大曆三
度以上 秋節候宜其立
兩度 大將以下帶弓箭
儀御前奉庭額間 左右
兵衛止南庭敷雷鳴御
座鳴雲時分陣是后殿
外衛督位候殿上著帶
弓箭候兼里解陣
御殿孫庇海ハ忌味不云
清涼殿孫庇甲、繪皮
書ハ此外ニ又版庇ヲサレ

為小路より供物とて入て申はつ
也トシ漢次トシ通樂トシの奈茂の四角田端の奈と
と申也

西七
飛米

東山西山山山をとりしふ取の山ふは
ぬ法がなきは陣原小米塩と飛
軍ふりし卿陣小はきそて人ねの
勃又と考ゆも六月賑給六月の飛米
れ災病孤獨ハもれ小米減ハもれ也城
りありのりも半小

西
雷鳴陣

此事あづら年中の事ハは入ゆ
月令け又小春も小雷のときと發一林
小雷のときとたふせとあゆむ夏
さうりも小春ととみくつりも小
りてさう小夏のかりり小一もあ
しそつへゆらるりりり人よすも小
あふ抄ハは六月迄前小の場ハ是ハ
たひりもやわ押雷鳴陣ハは音
雷の聲としひもさりゆきハ大將

不繪皮書日三時雨ノ音
聞ニ子夜夜ノ音ニ時雨
音ノ聞名ニハク也

龍登方金

○倭名録十襲芳舎在
發華舎北加美奈利乃
皇保以霹靂俗謂之雷
也

延喜御宇

○倭名録霹靂辟風二
反俗云加美一云加美
及俗云豆一云止介
霹折也霹歷也所歷皆
破折也

○扶桑略記云醍醐天
皇延喜八年五月廿六
日戊午也三刻從覺宿
山上黑雲起急有隱澤
俄而雷聲大鳴隨清涼

殿坤第一柱上有霹靂
神火侍殿上者大納言
正三位兼行民部卿藤
原朝臣清貫衣燒胸裂
天亡年六十四又從四
位下行右中辨兼內藏
頭平朝臣希世燒顔而
臥又登紫宸殿者石兵
衛佐忠包髮燒死亡紀
藤原腹燔悶亂安徳宗
仁勝燒而歸民部卿朝
臣載幸至陽明門外
載重希世朝臣載幸至
至陽明門外載重時兩
家之人悉亂入侍哭泣
之聲禁止不休自是天
皇不豫

百回幸氏ノ小子ノ
此故事ノ節記出有

平之清乃決將きてら若と等一とく
御殿乃孫成小作一て御門門成ち後一
奉つりしなり打監山下のれ装束と
去ておる一と南殿の前れ毎よる
如是と雷鳴乃陣とく似式あり延喜れ
舎と雷鳴乃法やらと一と雷れと
とくれ又陣とく似式あり延喜れ
御宇小清原殿を霹靂震としてなる物
しきためしとゆるなるも
七月

百九 庚辰新田宗 冒

四月小作一かうてあつたふつと
早七日御新田
内膳司の毛成調をよとまふとくべ
と用事少あつ事もむじ一と幸
氏乃小子七月七日小死つりる雲鬼と
なりて人小癩病とつたり法存月
表録とあつ一とゆへはと素解と
りて是をよのまは年中れ癩病は
のそくとつ

○江次第云朱漆高机
四脚立筵上

○江次第云自御所申
下第一張置東北西北
等机上凡妻延喜十五
年例用

卷三様

○裏書云立柱有三様
常用半呂半律秋調子
也

○六百番歌合顯胎歌
サタヲク星谷ノ空ノシレ
トテ秋クシラスニゴトモ
ツ也

廣瀬調 八月ノ律也唐
三ノ中ノ下云

管絃音義云盤沙調水
音
所以名盤沙調者一
河江河必有迴曲流入
於海故水音名盤沙也
平呂半律或樂書言廣
瀬調大食調律呂之調
也平律調也

鳥籠一 廣府鳥籠旗江
成橋 應織女淮南淮南
子 廣淮南王劉安作二
十一卷今淮南子二
此事ナシ
續心譜記八 均作也

先七日なれハ為人仰てうごはりのし

拭取小入く乞巧奠あり御清涼殿也殿乃庭有

法く忍四きむくとそく黒漆灯臺のなび

ひく竹あり机乃と小多く黒漆此物とくあ

つと筆れことらとくそく是とく

はく忍乃と火とらふ取とすく

たふ物あり多くひ小あくとくあ

れはとくう柱とく地小この様あり法

秘の盤ニしき調半呂半律ありとく

庭へかり是ハ秘事とてゆらぬ小あ

人とのま觸櫓のじさ諫問時猶祭八天馬内長穰時猶祭應和とく

天平勝興七手小く海のむとく

きよの亭半織女あつりりとくれあひ

ぬむく鳥籠乃のすけ川小きとらりて法

とくとのべ橋とくして織女とくわく

り淮南子とく書小みくあり又續

心譜記小云桂陽城乃武下とのり人

他道とあくとくふとらりていこく育

七月小織女河とらりて事とくあ

○蒙水上世説部隆七月七日出日中仰臥問其故曰我腹中書也院盛○書言故事十卷竹林七賢傳七月七日諸院在中鋪陳其非錦繡社或時總角乃其長竿標大布嶺皇於庭中日未能免俗聊復爾耳泰善元興寺僧也○天長五年二月廿五日太政官符應修文殊會事右得僧綱牒備贈僧正傳燈大法師位勳操元興寺傳燈大法師位泰善等畿内郡邑廣設佛會辨除食等施給貧者此則依文殊涅槃經云若有衆生聞文殊師利

名除却并二億劫生死之罪若禮拜供養者生之慮恒生諸佛家願文殊師利賦神所護若欲供養修福業者即化身作貧窮孤獨苦惱衆生至行者前也而今勸操蓮化泰善獨在相尋欲行增感不已望請下符京畿七道諸國同修佛會現國司誦讀師仰所部郡司及定額寺三綱等郡別於一村邑屈精進練行法師以爲教主每于七月八日令修其事云中的言兼左近衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣奉勅云

うすしと渡がうひひたれの織女さぶ
履く葦半小指ととこくふきと
織女葦半のまろく敷くと世々人
侍るる也乞巧といふ事もふあ
うり事おら終り七夕祭とも云なり
か敷とせう人徳をとうせへて
年ゆとむきてふかろくふき
のあはれもく一車といのらふ
内小女叶といりこむいふ乞巧と
し也都路の腹中書とさく一院盛

羊止の禪といひ向したあも
是の東寺西寺して行るる仁の天
天長十年七月小大法師泰善
めく又殊會と行ぬあひ七月小
あはれと申格小くく
百十三 盃蘭盆 十四日
内務寮沖盆供とせうふ書所
徳乃小管名度一枚と敷くま

天平五年。續日本紀云。聖武皇帝天平五年秋七月庚午始令大膳職備五蘭盆供養。

五蘭盆。釋氏要覽下卷梵語。五蘭此云救倒懸也。

翻譯名義云。盆是此方貯食之器。三藏云。盆羅百味。式貢三尊。仰大衆之恩光。救倒懸之窘急。

翻譯名義集一翻。譯者謂翻梵天之語。轉成漢地之言。音雖以別。義則大同。宋僧傳云。如佛鉢。昔面俱華。但左右不同耳。講之言。易也。謂以所有易其所無。故以此方之經。而顯彼土之法。

○六神通。天眼 天耳 他心 神境 宿命 漏盡

○五蘭盆經云。於七月十五日。佛歡喜。日僧自恣。且以百味飲食。安五蘭盆。施十方自恣僧。云。誰自恣者。自己之過。悉他所舉。又自姿。事釋氏要覽下卷詳也。

○雲屬抄。相撲節より

供御八相撲ノ奉仕人即諸國ノ防人也

御存ありゆまの時にかりて天平六年七月
月小くしめく西園を並て入膳藏より
なふく見くしり西園を並て梵給たり
御懸救器と翻譯と佛急のうのう油よ
く給くと云心平の鉢鬼のくく
思ふ小くあさ鉢小くけんをけん
ト救器は此鉢鬼は若ともく小く
ハ油のり佛弟子日連りしめく六通
とあくと母のを取とみからふ鉢鬼の
中へ小くしりけんをくくくく則釋

考小南うて此若とすくりん事
けり七月十五日小南恣乃僧と依長
女月解脱法念んと説給一
經よりあり青新の天皇乃御時
為寺小くして決山乃くく
○日本紀齊明天皇三年七月作須弥山像於飛鳥寺西且設五蘭盆會
盆會とすうけられくく
諸寺とすうけられくく
百四 相撲 江次第八仁壽殿東廡相撲より東書云南殿無出
御之時於仁壽殿有召合振出之義
是の諸國乃供御人々をりわ月くく七月
小相撲の若くしりけんをくくく

○先二三月比大将以下於傳座定相撲使事關白大将隨身陣官贈弓矢數者等爲使遣諸國七道名相撲人也

○コトハ部領十書方葉集二十相撲國防人部領

使駿河國防人部領他類大伴家持進痛防人

悲別之心作歌麻酒良男能由伎等里於比及

伊田五伊氣濤和可礼五平之美奈氣技家幸

都麻

○江次第云勝方乱聲

負左勝者後頭右勝者然蘇利均只泰往車

浪手決時左員勝在最

奏院王亦有餘崇

兼奏進舞云云

○相撲夜出東書云非中夜出之令日相撲人取相撲也

○扶桑略記云相撲事

從柏原天皇御代至今

代の天皇皆盡好之貞

觀以後寂然無事今聖主不捨之亦不廢乎

○又延喜元年七月廿八月丁丑御覽重相撲世番於綾綺殿有此事

車介の先十六七日法ありひふる作の
まの御物と奉てたを乃次お小相撲あり
ゆきいりしめいかにあつたを乃
を勝方とわめて國へ使とくしりて相
撲とのとを葉うもあつたの使とす也
女六日小内取といふ事とまゝ仁壽殿
江次第東書云大月廿六日小月廿五日於仁壽殿東庭行之御物忌時於清
原殿有之近年申御物忌時義云内取之習礼也故左與右異右相撲也
よお御つらたを乃相撲人擯鼻けう人小かり
東書云相撲十五番畢若右故障
延久三年江記云相撲人三十人次第行列其裝束烏帽袴差細袴衣上著帶
不着下衣袴從姚左右各二十八人
あつたゆとまゝいふまゝにけり

勝負あり東書云乃合抜出者左右相撲相合也八月小呂合あり天皇皇南殿小

お御つらたを乃相撲人擯鼻けう人小かり

江次第云取奏之儀寛仁二年有論二條大関白先捕物次取奏文見之次捕

次將所持杖後取實大臣見文里之後取將所持杖自歸文云捕物取文或左

腹捕物見文白暮者不必穿敷止之云云

とりの十七日ありて勝乃方此参ありま

女九日小抜出とく相撲とくしりて河

寛きう海也神龜三子小くしりて河

りたりクラハのふゆり取寛平七子しりて
重相撲と河院ありまゝとく相撲れ
おつり河し小月奉紀小島仁天皇七
年七月小島麻乃びり小島士あり名

よの島麻乃願連こりよらうはる事
角あもさけに會十一天皇はり
まふくも小法師ふかんと奉侍ふ
ころの経もくは出雲國よむき
おのこあり野見宿禰くもれ侍
くは奉と則これと物くして相撲
と沖浪治くつる野見宿禰かゆはり
ころもきん願連のうきうらうき
てくつさくふふかこはくゆりさ
さきひのうらめあきき

言成朝相撲之始

皇五
祈年穀奉幣

是の年穀といのらんたり小女二社小
とくまはく家二月と七月と
びさくうき事いさけ小
れりの如
夏
仁王會
是も春の雨小あり
八月
夏
八朔風俗
こ法事いさく小中祝介く又正禮

大極殿
○仁王會懸五大力菩薩像一踊行之

之ニケリ同三年正月九日
 備天皇十二歳禁中ニテ前
 御事ニ由リテ後
 川院ノ御方ニ御位ニツカセ
 給テ官モラスニシテ足テ
 法度院ノ宮ヲテノ踐拜
 之ニシテ上ノ開ノキキテ
 之ニ生時ノ御相ニ書客四
 之ニ修明門院ニシテ
 トイテ上ノ天照大神御ハ
 カニシテ侍トシ同十九日開
 東ノ城ノ景景早打ノ
 カリテヒソカニ承明門院ニ
 イリテ御位何波院宮ト
 之ニ侍トシ公家ノ御
 之ニ侍トシ申テヤ法
 隆寺殿一糸大相國ニ
 之ニ今下リ共三月六日御
 事カニテ太政官廳ニ御
 即位ス

○天神事大鏡扶桑略
 記愚管抄北野縁起等
 詳也

御事ニ由リテ後
 川院ノ御方ニ御位ニツカセ
 給テ官モラスニシテ足テ
 法度院ノ宮ヲテノ踐拜
 之ニシテ上ノ開ノキキテ
 之ニ生時ノ御相ニ書客四
 之ニ修明門院ニシテ
 トイテ上ノ天照大神御ハ
 カニシテ侍トシ同十九日開
 東ノ城ノ景景早打ノ
 カリテヒソカニ承明門院ニ
 イリテ御位何波院宮ト
 之ニ侍トシ公家ノ御
 之ニ侍トシ申テヤ法
 隆寺殿一糸大相國ニ
 之ニ今下リ共三月六日御
 事カニテ太政官廳ニ御
 即位ス

夏 釋奠

上丁日

春二月小おちり

西十九 北野祭

四日

小野ノ神ノ御事ハ人ニ礼ス道ヲ事
 之ヲ約シトシテ
 延喜聖ノ御事ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ
 延喜聖ノ御事ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ
 延喜聖ノ御事ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ

女ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ
 延喜聖ノ御事ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ
 延喜聖ノ御事ハ右大臣延喜二位菅原朝臣
 之ヲ終リテ

得道來——御託宣ハ

勝尾寺開成 吾々之御

託宣也此ヨリ以來大善

護号ノ桓武末ニ名

○日本紀欽明紀訓

○解脫ヤスラク

八正道ハツポウダウ ○彌勒菩薩説

瑜伽師地論卷第六十

七 攝大釋分中 整開三

問何因緣故正語正業

正命説爲戒蘊等二因

緣故一依正受用法故

二依正受用財故謂正

語正業戒爲根本戒爲

所依方能受用一切正

法是故説名依受用法

由正命故不依矯詐等

起邪命法求衣服等此

爲根本此爲依處止受

用財是故説名依受用

財又於是處世尊説爲

增上清淨意現行性此

中依止貧等起犯戒思

依止猶詐等起邪追求

衣服等思若離此事應

知是名增上清淨意現

行性 問何因緣故正

見正思惟正精進説爲

慧蘊答由此慧蘊略有

三種作業因此三法方

得究竟謂通達諸法真

義是初業通達諸法真

義已即於真義爲他宣

說施設建立分別開示

令其易了是第二業爲

斷餘結法隨法行是第

三業如是三業由正見

正思惟正精進故如其

次第而得究竟 問何

公事村源下

とらへんくじり人しる家又津流るとて沖

お系乃儀ありき身て垢ち小初精し

くろくんと初使くくハ程字依又浦り

さ清和乃沖何の又安平法僧約寂字依

小浦うてさりしり靈者ありて今は増

山石清あ小う法すすしり分しりあり

ありし一後乃事も奉幣之し清あ

小河乃一代小一廣字法了も初使をあ

て浦うてさりしり宗廟とくハ大照太

津并小八幡大菩薩かハ沖事也八幡大

菩薩とくハ沖名ハ沖流宣小得遊来不動

法性示ハ心通ハ意惟ハツキタビ迹以得解脫ハツキタビ若衆生ハツキタビ

故号ハ八幡大菩薩とありハ中ハ内典小

心見ハ思惟心治心業心念ハ心精ハ心定ハ

念是とハ八正道ハツポウダウしりハ心ハ心ハ心

身口意ハツポウダウハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

十一

定遠答二因緣故一由自性故一由所依故由自性者謂三摩地由所依者四因緣故念於此定能作所依一取所緣故謂於四念住繫攝其心二隨順定故謂由此念於守護根門正知而住順歡喜處隨念作意中能隨順定三能斷蓋故謂於各別不淨觀等諸蓋對治作意能斷諸蓋四極多修習相作意故謂遠離者於止舉捨相無間殷重加行中能多修習是故此念為定所依

八色幡○八色幡即應神天皇御正體幡神也幅軍陣大事物出陣時先幡祭古禮也

三昧耶形○空海四種曼茶羅義云且於畫造諸尊者以五大色畫作影像者大曼茶羅造所持刀劍蓮華等三昧耶曼茶羅捏鑄刻等像羯磨曼茶羅畫三十七尊等種子字者達磨曼茶羅○又云三昧

耶曼茶羅所持標幟是也○又云三昧耶平等類之義○三昧耶形略略三形上云除陀三尊拾芥下本阿弥陀三尊觀音勢至也古八翻觀音人翻輪圓具說袈裟上三ツツネ○衣笠內府歌石清水スミハダケ月影ノミカケウツノ

續古事談第四行教和尚一夏九旬宇佐宮籠て畫大乘經讀夜ハ真言ヲ誦テ法樂ニ及テミツル九旬三千七ノト太時我王城ノ近邊三向テ國家ノミカケツツト託宣給テハ涙ヲ流シテ十日延テ御體ヲ見タテミツラト祈

三衣箱ノ見止ト託宣アリケハ是ヲ見生七條袈裟上字ニ非テ繪ニ非テ阿彌陀三尊現タニ行教此御安ヲウツテテシサテ示ハナリテ此由ヲ奏ス帝御夢男山ノ上ニ紫雲多クホリテ王城ヲ覆御覽キ此事九ハ

トトイキ御殿ヲ作内裏中ニ此御體ヲカケタテテリテ取テ見ケナク御殿預御座ヲ多時テ台至テ敷此内殿ノ中ハ常ニカクハレキ香ニカヘリト

○翻譯名義集七袈裟具云迦羅沙曳此云不正色從色得名章服儀云袈裟之目因於衣色

如經中感色衣也會是準此本是草名可捺衣故將被草具此衣號十誦以為數具謂同氈席之類隨法門經云袈裟者昔名去穢大集名離染服皆名出世道真諦記云袈裟是外國三衣之名名多義或名離塵服由斷二塵故或名消瘴服由制煩惱故或名蓮華服服者離若故或名閒色服以三如法色所成故言三五者律有三種袈色青黑赤謂謂銅青謂雜泥木蘭即樹皮也黃疏云顯以分截成消

及不為然賦所到技云應法師云翻作聖筆音加萬洪字苑始改從衣

頂戴らるる男山は安置了けり
神のり本地とり事多し
さるるおほくゆきと大菩薩乃高座
昔らあき座りながら澄淨あり
くや或は又昔靈鷲山にて法衣
と説くも或活動なりなり大り
諸天傳云梵蓋摩醯首羅此翻大自在或翻威靈帝或云三目智論立三界主即摩
薩伽らるる境堂一に阿字中
醯首羅為三界尊極之主靈寶經亦稱三界主其居處也在色界頂
八心乃備とそくハおんか生と海度
一々々々々々々々々々々々々々々々
敬一奉ふさ也々々々々々々々々々々

八事長原下

最勝王經

最勝王經。金光明最勝王經也。十卷。唐三藏法師義淨奉制譯。

○金光明最勝王經卷第九長者子流水品第二十五爾時佛告其提樹神善女天爾時長者子流水於往昔時在天自在光王國內療諸眾生所有病苦令得平復受安隱樂時諸眾生以病除故多修福業廣行惠施以自歡娛即共往詣長者子所咸生尊敬作如是言善哉善哉大長者子善能滋長福德之事增益我等安隱壽命仁今實是大力醫王慈悲菩薩妙開醫藥善

療眾生無量病苦如是稱讚周徧城邑善女天時長者子妻名水肩藏有其二子一名水滿一名水藏是時流水將其二子漸次遊行城邑聚落過空澤中深險之處見諸禽獸豺狼豺獾鷹鷲之屬食血肉者皆悉奔飛一向而奔時長者子作如是念此諸禽獸何因緣故一向飛越我當隨後暫往觀之即便隨去見有大池名曰野生其水將盡於此池中多有眾魚流水見已生大悲心時有樹神示現半身作如是語善哉善哉善男子汝有寶義名流小者可憐此魚應與其水有二因緣名為流水一能流水二能與水汝今應當隨各而作是時流水問樹神言此魚頭數為有幾何樹神答曰數滿十千善女天時長者子聞是數已倍益悲心時此大池為日所烘餘水無幾是十千魚將入死門旋身宛轉見是長者心有所希隨逐瞻視目未嘗捨時長者子見是事已馳趣四方欲覓於水竟不能得復望一處見有木樹即便昇上樹取枝葉為作帳涼復更推求見池中水從何處來尋覓不已見一大河名曰水生時此河邊有諸漁人為取魚於河上流懸險之處決棄其水不令下過於所決處卒難修補便作是念此崖深峻設百千人時經三月亦未能斷況我一人而堪濟辨時長者子速還本城至大王所頭面禮足却住一面合掌恭敬作如是言我為大王國土人民治種種病悉令安穩漸次遊行至其空澤見有一池名曰野生其水欲涸有十千魚為日所暴將死不久唯願大主慈悲憐念與二十大象暫在負水濟彼魚命如我與諸病人壽命爾時大王即勅大臣速疾與此醫王大象時彼大臣奉王勅已自長者子善哉大士仁今自可至象廐中隨意選取二十大象利益眾生令得安樂是時流水及其二子將二十大象又從酒家多借皮囊往決水處以囊盛水象負至池瀉置池中水即彌滿還復如故善女天時長者子於池四邊周旋而視惟彼眾魚亦復隨逐循岸而行時長者子復作是念眾魚何故隨我而行必為饑火之所惱逼復欲從我求索於食我今當與爾時長者子流水告其子言汝取一象最大力者速至家中啓父長者家中所有可食之物乃至父母食噉之分及以妻子奴婢之分悉皆收取即可持來爾時二子受父命已乘最大象速往家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾驅還父

かしのり元正天皇皇乃沖字養老四子
九月異國藝事乃雨大菩薩乃公神力
政事要略大隅日向集人云云
小してよしく吳歌とありそけつり
てのら久菩薩乃鏡室小合我乃あひ
多あはく乃んびと海一ぬ救生會と
の海きんまるとあり一ふしてあき
一徳國してこ北事しと好生れい
かき事一最勝五流長者子流水品計
池奥其事しとありたこまらるるわ海と
いあらよのり沖りしひはかとあ

爾時二子受父命已乘最大象速往家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾驅還父

所至彼池邊是時流水見其子來身心喜躍遂取飯食備散池中魚得食已悉皆飽足便作是念我今
 施食令魚得命願於來世當施法食克濟無邊云云佛告善女天爾時長者子流水及其一子為彼池
 魚施食施食并說法已俱共還家是長者子流水復於後時因有聚會設眾妓樂醪酒而臥時十千魚
 同時命過生三十三天起如是念我等以何善業因緣生此天中便相謂曰我等先於瞻部洲內隨傍
 生中共受魚身長者子流水施我等食以飯食復為我等說甚深法十二緣起及陀羅尼復稱寶髻如
 來名號以是因緣能令我等得生此天是故我今感應請彼長者子所報恩供養爾時十千天子即於
 夫沒至瞻部洲大醫王所時長者子在高樓上安穩而睡時十千天子共以十千真珠璣珞置其頭邊
 復以十千置其足處復以十千置於右脇復以十千置左脇邊再曼陀羅華摩訶曼陀羅華積至于膝
 光明普照種種天樂出妙音聲令瞻部洲有睡眠者皆悉覺寤長者子流水亦從睡寤是時十千天子
 為供養已即於空中飛騰而去於天自在光玉國內處處皆雨天妙蓮華是諸天子復至本處空澤池
 中雨眾天華便於此沒
 還天宮殿隨意自在受
 五欲樂云云爾時佛告
 善提樹神善女天汝今
 當知昔時長者子流水
 者即我身是云云
 猪鼻十五日上院
 下院神幸道路上院南
 門大坂之經于猪鼻
 到下院南門入也

於今一正久二心一の約幸小准ちく色
 て六府ら下供奉しつる幸ふふの終り
 早且よの志くわと神樂くくくせ給ふ
 何の約幸の儀式して多樂のちをて
 くと先衣冠けくせけひひくくく

猪鼻坂の出崎也

○朗詠下朝有紅顏跨
 世路暮寫白骨朽郊原
 廢跡依稀

○古六觀政要二下特臨
 神處

物使状○延喜式四十
 八左馬寮式御故事詳
 也

そ是小形さくくく事のありさゆの
 神人信仲系小の系すて白杖と流
 りくくく事小のり奉る儀式也
 約小形さくく世給小はさきども夕
 くは白骨と成く郊原小くらわと
 かり世世ありさゆとありくく小神
 唐三六歳感事也
 百廿二
 駒亭 十有駒亭の外にさかきなる邊
 為杖くくく
 信濃勅旨牧十六箇所延喜式所載之一也
 く小の信濃の物もねれ馬とをなふ六十五

百五 不堪回奏

七日 式日九月五日

是日徳國の田の播き一はる所を日録
として奉承せられよつあそ租税減三
分二なりと先し給ふ事あること御ふ
諸國への評付帳とてせしむるに大長陣
をたきこりてゆりて諸國小旗の
ゆりゆりほくつよよとて御とて
心よ不徳回へりてせしむる御とて
事一

百五 重陽宴 九月五日

物比宴 延喜掃部寮
式九月九日菊花宴神
泉苑殿上御座及設
參議己二座又幄下侍
從文人等座

九月九日 書言
故事魏文帝書歲往日
來忽逢九月九日九爲
陽數其日與月並應故
曰重陽
○花宴河海抄云探御
各分一字詩也

九月九日の花月にて行進の菊花乃宴の
りて是と重陽宴とて九月九日
月とりて九陽乃數ふ叶の少は重陽と
はいふなり昔の天子南殿より御あり
ては金釣りのとて是を御子とてあり
ありて其道乃に三帆探御給ひりて又はり
又是を小とてとて御ありて十月十日の
ありてはりも是と給ふ御ありて是
は小菊酒と給ひりてはりてはり
りて御ありてはり小菊酒と給ひりてはり

費長房一〇續齊諧

記云汝南桓景隨費長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄宜去冷家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此禍可避見雞犬牛羊一時暴死長房聞之曰代之矣今世人每至九月登山飲菊酒帶茱萸囊是也

昔神祇官行幸りテ

○昔八省院行幸止延喜式太政官式云凡九月十一日行幸八省院奉幣於伊勢大神宮其他者太政官預點五位以上五人卜定都人大臣奏聞宣命授使王并神祇官中臣忌部發遣儀式

○其後神祇官行幸下後醍醐年中行事云十百例幣行幸り出御ノ儀常ヨリ内侍御鷹持テ前後候近衛次官若大藏人扶持御輿葱花ヲ用圓司鈴奏テ神祇官行幸テ北庇御輿ヲマシ帳内ナリ内侍二人候近衛ニケ智多取傳

前小菊瓶をさくまゝに茶菓の房をわく
瓶花瓶をさくまゝに茶菓の房をわく
のりじつ費長房との仙人汝南の桓
景よりしていさゝか悪氣をさくまゝに
よるまへに茶菓の房をわくひら小
けふふのがつまゝ菊酒の徳を信受
さひへしをさくまゝにわくひら七
しへのつまゝにわくまゝにわくひ
わくまゝに家中の鶏犬羊をさくまゝに
さくまゝにわくひらつまゝにわくま
つまゝにわくひらつまゝにわくま

美酒とのむいひはつまゝにわく

例幣 十一日 江漢第九

一日のつまゝにわくまゝにわくま
此人を内とせしは神事つまゝにわく
例幣とは伊勢を神文へ御幣をさくま
つまゝにわくまゝにわくまゝにわく
冬に也若し神祇官へ行幸りつまゝに
つまゝにわくまゝにわくまゝにわく
幣と清らりていひ使乃まゝにわく
つまゝにわくまゝにわくまゝにわく

加常下御ナリテ平敷ノ御座ニツクセ給大床子モヨリ所ニ布衝立障子ヲ立テ隔テ東ハレ御厨子間ニ御幣ヲ置テ祭ニツクテ其ニケケテ次ノ間ニ御座御座ヲ設ケ常ノ如ク先座ニテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御櫻ノ御座著せ給御坊ヲ召テ先御拜リ次余々人々ニ聲必納言參テ版ニツク中臣忌部メセト仰ニ少納言跪テ仰ニ奉テ高ノ稱唯ニテ楫シテ出中臣忌部メイリテ版ニツク先忌部ツクス忌部參リテ外官ノ御幣ヲヨリテト部ニ傳フ其後内官御幣ヲ忌部

カニハテシテトリテ多ク捧持テ版ガヘリ多ク中臣ヲメス中臣祭主參テ御幣ヲツク案ノ下ニ跪ヨク申テ奉テ仰ニ中臣稱唯ニテ出使ノ三御馬申事トシ恒奉幣ノ事トシ神祇官東門ヲ出テ祭ノ大路ニツクホトニ御座ヲタ各給懸御幣ノ聞ニツクテ選御幣ノ如ク使玉江次第云吏王可給馬ノ御記付藏補風伊勢國ノ神風ハ伊勢云批詞也神武天皇ノ御誥伽牟伽能伊勢能宇添トツケレニヨ始ニ日本紀下何カ政神風ノ伊勢云云云伊勢國風土記云夫伊

乃御所ナリテ平敷ノ御座ニツクセ給大床子モヨリ所ニ布衝立障子ヲ立テ隔テ東ハレ御厨子間ニ御幣ヲ置テ祭ニツクテ其ニケケテ次ノ間ニ御座御座ヲ設ケ常ノ如ク先座ニテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御櫻ノ御座著せ給御坊ヲ召テ先御拜リ次余々人々ニ聲必納言參テ版ニツク中臣忌部メセト仰ニ少納言跪テ仰ニ奉テ高ノ稱唯ニテ楫シテ出中臣忌部メイリテ版ニツク先忌部ツクス忌部參リテ外官ノ御幣ヲヨリテト部ニ傳フ其後内官御幣ヲ忌部

乃御所ナリテ平敷ノ御座ニツクセ給大床子モヨリ所ニ布衝立障子ヲ立テ隔テ東ハレ御厨子間ニ御幣ヲ置テ祭ニツクテ其ニケケテ次ノ間ニ御座御座ヲ設ケ常ノ如ク先座ニテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御櫻ノ御座著せ給御坊ヲ召テ先御拜リ次余々人々ニ聲必納言參テ版ニツク中臣忌部メセト仰ニ少納言跪テ仰ニ奉テ高ノ稱唯ニテ楫シテ出中臣忌部メイリテ版ニツク先忌部ツクス忌部參リテ外官ノ御幣ヲヨリテト部ニ傳フ其後内官御幣ヲ忌部

乃御所ナリテ平敷ノ御座ニツクセ給大床子モヨリ所ニ布衝立障子ヲ立テ隔テ東ハレ御厨子間ニ御幣ヲ置テ祭ニツクテ其ニケケテ次ノ間ニ御座御座ヲ設ケ常ノ如ク先座ニテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御櫻ノ御座著せ給御坊ヲ召テ先御拜リ次余々人々ニ聲必納言參テ版ニツク中臣忌部メセト仰ニ少納言跪テ仰ニ奉テ高ノ稱唯ニテ楫シテ出中臣忌部メイリテ版ニツク先忌部ツクス忌部參リテ外官ノ御幣ヲヨリテト部ニ傳フ其後内官御幣ヲ忌部

乃御所ナリテ平敷ノ御座ニツクセ給大床子モヨリ所ニ布衝立障子ヲ立テ隔テ東ハレ御厨子間ニ御幣ヲ置テ祭ニツクテ其ニケケテ次ノ間ニ御座御座ヲ設ケ常ノ如ク先座ニテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御櫻ノ御座著せ給御坊ヲ召テ先御拜リ次余々人々ニ聲必納言參テ版ニツク中臣忌部メセト仰ニ少納言跪テ仰ニ奉テ高ノ稱唯ニテ楫シテ出中臣忌部メイリテ版ニツク先忌部ツクス忌部參リテ外官ノ御幣ヲヨリテト部ニ傳フ其後内官御幣ヲ忌部

聖國者神武天皇勳詔
 天日別命日國有天津
 之方宜乎其國印賜標
 綱天日別命奉勅東入
 數百里其邑有神名曰
 伊勢津彥天日別命問
 曰汝國處於天孫誰答
 曰吾竟此國居住日久
 不敢開命矣天日別命
 發兵欲戮其神于時畏
 伏啓云吾國悉獻於天
 孫吾不敢居矣天日別
 命令問云汝之去時何
 以爲驗啓云吾以今夜
 起八風吹海水乘波津
 將東入此則吾之却由
 也天日別命令整其鏡
 之比及中夜大風四起
 扇舉波瀾如暉如自陸
 國海共開遂乘波而東

わりの天皇南殿より出陣ありては
 わり是をさきみれば向く冬よりなり二就
 の後お魚波那泊よた向ふは夏は向
 うはあき波なる中ふたりの儀あり
 夏ふむらりら古宮湯殿より平
 座あり賜沙魚儀清膳采女は天の氣
 所獲乃お魚ととりてまじふた
 己と拾取之なりし御成てくた
 言江次第事ヲ取用又捨不用大略ヲ書也
 重書件氷魚是鹽等給公卿云云
 中ふと一ほよありしころなり
 百三十一
 承子餅
 と言日

馬古語云神風伊勢國
 常也浪寄國者蓋謂之
 也詔曰國宜取國神之
 名號伊勢
 傳命の垂仁天皇第
 四之皇女也。二所大
 神宮鎮坐事倭姬命世
 記鎮坐本紀鎮坐傳記
 二詩也
 養老五年一の續日本
 紀八養老五年九月し
 卯天皇御内安殿遣使
 供幣鳥於伊勢大神宮
 〇兼御抄云為松
 武被名所茂社司福河
 院御時願以下向嵯峨
 野誠有道造是餘虫屋
 向藤虫奉之
 内藤司式云山城國

此餅の内務寮よりうりては餅餅を
 さころり十月の末日餅と食せれ
 し病のしりし事説ありに後事
 い川ゆらけしふもみりしと近衣
 延喜式無名日餅事政事要略二十五引藏人式云十月初五日内藏寮進上男如
 武小裁しりしは右のりもわりの事し
 料餅並禮の本朝書籍目録に藏人式二巻編廣相撰廣指自觀年中八
 事しりしは承安四年小さしりし
 高倉院
 て大外記載重御尚りし物又と海
 してはそれと奉朝のりしと行ふ
 してふとしりしは承安四年書を承
 とのりしり

近江國水魚網代各一
處其水魚始九月至十

二月晦日貢之今案近
紅白上網代七名水魚

ヲ山城守治三取上ヨリ

云々傳名抄云鮒考聲

切韻云鮒音小今案俗

謂學記冬事鮒雖有水

魚霜鴈之久而事其義

非自魚名也似鮒魚長

一二寸者也

〇西宮云冬賜水魚采

女取水魚盤五座前庭

一八名内堅秘參進公

卿方取云〇宇治網代

水水魚取為也後宇

多院御宇沙門殿尊ノ

奏請依テ弘安七年二月

廿二日官符ヲ下テ網代ヲ

停廢也

家子餅十月亥日餅ヲ

不食也一政事要略

第二十五卷忌隆崇云

十月亥日食饒除萬病

徐鉉初學記卷之二十

六雜五行書曰十月亥

日食餅令人無病

〇倭名御抄氏産語

抄云射樂以久皮止古

際世間云何無正如今

按之用翔字

〇江次第殿東欄下敷

小筵二枚其上供半帖

高

〇昔家文草第五卷禮

類各分一字應制序云
貴華之過重陽世俗謂
之殘菊〇類聚國史七
十四類武天皇延曆十
六年十月余亥夜曲宴酒

百廿二 射湯始

五日

先以月九三日小名湯乃与湯乃咽之
了六日天子少名湯乃与湯乃咽之
上御鏡止ら也之乃下末第一して之凡
其い於天子御射殿と志の進して与矢
と湯乃乃在衣法りき小くそく湯乃
は群湯とひと一冬湯とと射湯あり
なり誠小文武二川乃進ら一を以て湯
乃と湯乃の亦小今天子も与湯殿小
乃湯乃と武道となしと湯乃と湯乃
なりは信小射湯始なりと膳と者人の
難は膳らうくは相撲乃さむわの食
おとす也

百廿三 殘菊宴

昔菊宴多ん九月九日して又殘菊乃先
とて十月六日小約り進りしなり是れ
那江侍と作酒とた向ふ事重湯心
なり

百廿四 興福寺法華會

九月廿日しる七ヶ日乃同南園堂なり

神皇帝歌曰己乃己
乃志具礼乃阿米爾
乃波奈知利曾之奴倍
殿阿多良蘇乃香乎賜
五位已上衣服
長嗣大臣○房前之孫
真捕第三之子也延曆
十八年四月十九日任
右大臣弘仁三年十月
六日薨

春日明神ノ○新古今
八使本明神ノ○三之三歌
上ノ○新古今第十九
袖祇歌 補陀落南ノ
岸堂多今ノカノ北ノ
藤波 此歌興福寺ノ
南圓堂ツリノシノ時春
日、根本明神ノ給
ケトナニ 根本明神諸
神記云自春日在埔坐

女神也号曰勢姬明神
又一書云復本社者猿
田彦狹津姫命也
補陀落南岸ノ奉尊御
記云興福寺一名觀音
寺自昔古寺也麻坂寺
事也補陀ヲク南ノ岸ノ
詠歌此故也
山階寺トモ申カ 元要記
第一卷云天智天皇即
位八年大織冠 燭室鏡
女三季爲大織冠山城
國宇治郡山階郷 伽藍
立ニ丈六釋迦像ヲ安
置セラレ山階寺ト名
次天武天皇即位元年
申都ヲ大和國高市郡
遷并ニ時山階寺ヲ彼
郡麻坂移シテ仍號麻
坂寺元明天皇即位二

して妙法乃人會をひらきしは是を十
月六日長安大内閣磨乃沖志日小を
つら閑院贈左政大臣を解公ハ彼大内
卿子ハ孫小して父乃沖志先小ハ
りくひし世給々々もも無福
南無堂乃本寺乃本堂竊索觀者乃儀
每小回天皇乃儀ハ長岡大内乃遣立
給ひしとのら小閑院大内乃南無堂と
きててし儀今をそと安到し給し是
補陀落乃南れし小堂しそと此
ヲテ山谷詩十九ニ海岸祇絶處補陀落伽山譯者以謂小白花山

ぬるし今よりそとひく春日乃の神乃
人史の中小師しつら給くわそそ
きし事ハ一儀南園堂と建を性
時乃事ハしらそ終ハ蘇原氏之南家
小家武家京家とて回家よりそとあり
房前 式部卿命本名鳥羽
しそと三家の終果く小家のそと人ハ
事ハひくそと儀神奇徳徳乃そと
西暦 維摩會 十日
是ハ十月十日十六日小いそとそと七
十日付問會福乃そと維摩會と儀そと

年也和銅二年都大和
國添上郡平城宮遷
レシ時大織冠ノ子淡海
公上春日勝地被立加
蓋此時改額寺興福寺
同七年被遷供養此
一寺之内被建立堂塔
六也

○維摩詰所說經十卷
第五卷有問疾品

和銅七年政事要略慶
雲二年卜了
湖之為朝蓋是會力政
事要略維摩會石先正
一位太政大臣奉爲聖
朝安穩社稷無傾謹錄
弘誓經開斯會

大報申文 ○江次第大
報申文 十月申了上
加
此文一取申之如例申
文扶義御爲左大辨諸
文之時作大報式
司諸齋有定國 院官
隨時出入爲閏月之時
又願作代其後成官持
近代諸司院官不持官
符成催辨諸國物以件
請文成承知符最可極

十六日冬大織冠乃沖長日乃なる所なり
興福寺ノ大織冠乃沖長日乃なる所なり
經具冲子淡海之と被は化まき
山階寺ともなり大織冠病悩
大織冠病悩ヲカセテ 政事要略第廿五卷出了
今いひまきしと被病あり
海時乃百瀬乃危和と被のいひまきを
乃乃小りまきと被と被と被法維
摩經といひ其經中乃同疾品と
いふ所ありまきと被補一給まき
沖病乃現乃被給てんまき小まき

則此一品と被まき小いまきと被
了まき小大乃沖病乃まきと被給まき
大乃被前命帯一七まき世と大乃小野依
現んとらつり世給ま被乃維摩會の和
銅七年小淡海之興乃まきとまきとまき
亦まき一い會いしと團まきてもまき
乃まきまき小野乃神乃沖持乃まきと名
開三國會馬興福乃之乃被蓋是會か
乃まき乃まきまきまきまき

大報申文

百廿六 初雪見冬

○謝惠連雪賦... 呈瑞於豐年... 今於陰德... 出慶事... 也

藤臺... 倭名鈔... 在弘徽殿北... 手木... 近比... 物也

昔初雪乃少... 雪見冬... 一月... 深雪乃... 其... 山... 院... 時... 也

○禁秘抄云... 翟所... 皇隱... 可參

其... 院... 時... 也... 山... 院... 時... 也

十月... 御贖... 一日

育小... 御贖... 一日

御贖... 一日

○白虎通六班固作也
 曰虎通三卷三正章
 禮三正記曰正朔三而
 改文質再而復也三微
 者何謂也陽氣始施黃
 泉萬物動微而未著也
 十一月之時陽氣始養
 根株黃泉之下萬物皆
 赤赤盛陽之氣也及周
 爲天正色尚赤也十二月
 之時萬物始牙而白
 者陰氣故辰爲地正色
 尚白也十二月之時萬
 物始達乎地而出皆黑
 人得加功故夏爲人正
 色尚黑

欽明天皇十四年有六
 月博士等宜依番上
 曆博士等宜依番上
 令上侘色人正當相代
 手月宜月還使相代又
 上書曆本種種藥物可
 付送
 賀表○江次第一大臣
 以外記令仰上藤儒士
 令作賀表或大臣自仰
 神龜二年○續日本紀
 第九聖武天皇神龜二
 年十一月己丑天皇御
 大安殿受冬至賀臨親
 王及侍臣等奏持奇翫
 珍贄其之即引文武
 百寮五位已上及諸司
 長官大學博士等宴飲

中勢省しりゆ子乃唐とするをじし
 主と南殿小お清りして是と清流あり
 空清りも可お清り小はく白虎通は
 周の春は十一月と三月とんをと唐
 家りて正月と三月と四月代は十二
 月と三月と他正月と三月夏の世は
 今れ正月と三月とん人正月と三月
五月也
 二陽りりて生海月を終は一年は唐
 教とわんぐく今日を子りなるを
 唐りしお初は唐かをりし事ハ

欽明天皇十四年百海乃博士奉り
 是ハ十一月一日の冬を小あはる
 かり可手小一度まある年りて
 祥瑞りる小りてそれせし
 小お清りりる旬とゆく
注次第朔旦旬トヤリ
 と奉り事なりと有種龜二年十一月
 小お清り大安殿小お清りて冬を
 辞とりけ給りし國史ふのきり

終日極樂乃龍賜祿者
有差

神祇令云云 神祇令云云
仲冬上卯相嘗祭 義解

謂大倭住吉大神穴師
恩智意富葛木鴨紀伊

國日前神等類是也神
主各受官幣帛而祭

大倭の大和國山邊郡
大和坐大國魂神社三

座 住吉の攝津國住
吉郡住吉坐神社四座

大神の大和國大神大
物主神社大神即大三

輪也 穴師大和國城
上郡穴師坐兵生神社

恩智神社二座の文德
實錄第二嘉祥三年冬

十月辛亥授河内國恩

智大御食津彦命神恩
智大御食津姬命神等

並正三位 意富多也
○大和國十市郡坐

弥志理郡比古神社三
座 葛木鴨の大和國

葛上郡鴨都波八重事
代主命神社二座

百前 紀伊國名草郡
日前神社 神主の令

集解 倭大倭社 大倭
忌寸住吉社 津守連

大神社 大神氏穴師
社 穴師 神主恩智社

恩智神主意富社
大朝臣葛木鴨社 鴨

朝臣下アリ
ツツシ胸形社也 延喜

喜式神名張筑前國宗
像部宗像神社三座

公事抄下

我朝の... 小あ... 異國... 延喜式... 宗像祭... 同日... 命未葉也

延喜式... 宗像祭... 同日... 命未葉也

同日... 命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

命未葉也

素戔嗚尊ノウミ冬ヒシ

宗像神天照大神

冬ヒシ神也天照大神勅

三素戔嗚尊曰

淵織津姬命

淵織津姬命

神也阿波良波命傳

天照大神荒魂ト云倭

姬命世記云八十柱津日

神一名才介宗像三神

内ノ湍津姫ト別神也

田心姫湍津姫市村

鳴姫三女神天照大神

神勅汝三神宜降居道

中奉助天孫而為天孫

所祭ト云神數多受テ故紫

洲天降玉ヲ升レ此神祭重

事ト云

西十二

山科祭

丁巳日

四月小正月

西十二

平野祭

丁申日

是も四月小正月

西十二

春日祭

同日

是も二月小正月

西十二

杜本祭

同日

四月小正月

西十二

當麻祭

同日

同

西十二

率川祭

丁酉日

二月小正月

西十二

梅文祭

同日

四月小正月

西十二

當宗祭

同日

四月小正月

西十二

中山祭

同日

松尾祭

西十二

同日

四月小正月

西十二

同日

上乃申す日不^レ久^レ一^レ （西暦）

西暦三 大原野祭 申子日

二月小おね一^レ 雲の上法印日不^レ久^レを
子日不^レ久^レ

西暦 園新^ニ韓^ニ祚^ニ祭 申子日

二月よりおね申す日不^レ久^レを
常金^ノの^レ後^ニより^レひびき^ニと^レ入^レ世
日^ノの^レ久^レ一^レ

西暦五 五帝 同日 申子二^レあ^レく^レ可^レく^レ申^レ用

式下 申子日^ノ用也

○東御直衣御指貫浮
文織物紫御指貫霞此窠
文也深青淺紫共^レ有^レ例
○表袴 大
○張袴
○生袴

申子乃日と云ふ五帝^ノ儀^ニ試^ニと^レ常^ニ穿^ニ
殿^ニて^レ自^レと^レ御^ニ流^ニあり^レ大^ニ帝^ノ舞^ニ姫^ニ又^レ
人^ノ介^ニり^レ油^ニい^レり^レ儀^ニ式^ニあり^レま^ニう^レら^レく^レ油
い^レ新^ニと^レ儀^ニ産^ニと^レり^レ子^ノ等^ニ油^ニい^レり^レと^レり^レを^レり
て^レ儀^ニ試^ニ小^ニお^レ清^ニう^レり^レ殿^ニと^レ人^ノも^レ指^ニ燭^ニ

さ^レし^レ御^ニ衣^ニ小^ニお^レ指^ニ貫^ニと^レ御^ニ流^ニあり^レ大^ニ帝^ノ舞^ニ姫^ニ又^レ
（西暦） 儀^ニ式^ニあり^レま^ニう^レら^レく^レ油
い^レ新^ニと^レ儀^ニ産^ニと^レり^レ子^ノ等^ニ油^ニい^レり^レと^レり^レを^レり
て^レ儀^ニ試^ニ小^ニお^レ清^ニう^レり^レ殿^ニと^レ人^ノも^レ指^ニ燭^ニ

禁秘抄詳也

事^ニ付^テは^レ儀^ニ式^ニあり^レま^ニう^レら^レく^レ油
い^レ新^ニと^レ儀^ニ産^ニと^レり^レ子^ノ等^ニ油^ニい^レり^レと^レり^レを^レり
て^レ儀^ニ試^ニ小^ニお^レ清^ニう^レり^レ殿^ニと^レ人^ノも^レ指^ニ燭^ニ

儀^ニ試^ニ小^ニお^レ清^ニう^レり^レ殿^ニと^レ人^ノも^レ指^ニ燭^ニ

た^レも^レ一^レま^ニう^レら^レく^レ油
い^レ新^ニと^レ儀^ニ産^ニと^レり^レ子^ノ等^ニ油^ニい^レり^レと^レり^レを^レり
て^レ儀^ニ試^ニ小^ニお^レ清^ニう^レり^レ殿^ニと^レ人^ノも^レ指^ニ燭^ニ

○又云承平五年無殿
上五節寬平昌泰間

五節舞姫之り政事

要略第廿七年申行事

廿七十一月三日辰日節

會事 五節舞者淨御

原天皇之所制也相傳

曰天皇御吉野官日暮

彈琴有興俄余之間前

岫之下雲氣忽起疑如

高唐袖女髮鬢應曲而

舞猶入天賜他人無見

舉袖五變故譜之五節

其歌曰乎度歸度茂色

度綿左備瀆茂可良多

万乎多茂度途麻岐底

乎度綿左備瀆茂

字摩志麻治命饒速日

尊第二子也 舊事本

紀警余茂尊元年十月

庚寅字摩志麻治命初

齋瑞寶奉為帝后鎮祭

御魂祈請壽祚其鎮魂

之祭自此而始矣

御脫履 ○御讓位了也

○文選四十三北山移

文履篇乘其如履註淮

南子曰堯年衰志闕舉

天下而傳之舜猶却行

行履篇也許慎註曰言

意易也

毛テテ ○倭名鈿祭祀
具葉手 漢語抄云葉
手比良天

て即ちあつらひの儀と云はるるにびとをさしつたまは

りし小ゆきききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききき

五月ふゆきききききききききききききききききき

いわりきききききききききききききききききき

百五十六 法魂祭

十一月中寅有二寅下寅行之有
中寅百例云而新嘗會前
可行之旧見式

それ人へは魂魄乃こ乃玉あり魂陽氣

魄陰氣なりこれおふ難極は魂魄成

まのきききききききききききききききききき

能あり字摩志麻治命れ対り事れ

これきききききききききききききききききき

此祭と法魂祭とをさるるは殊勝の御

初と成るるをさるるは白川流の御

脱履の儀も流中にて行はるるは

東之入中宮にて是年とあり事今も

天安二年小きききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

きききききききききききききききききき

由藤中納言侯之云予
答云跪飲了并海瀧下
居又受酒授盃了可喝
平至次之入者乍立
受酒自不欲之授盃可
唱平舞如藤中納言存
知者可為献盃獻代記
勅孟之由皆記之跪茶
又無不密獻土器也可
在此皇之由說之

國忌職員令義解國忌
謂先皇崩日也
崇福寺拾芥下末崇福
寺近江國志賀郡號志
賀寺天智天皇御願
來鳥二毛朱鳥八天武
天皇羊号朱鳥一羊
号終之其明羊持統
天皇元年也
中興祖庭事苑第六卷
云玉室中否而再興謂
之中興如周之宣王漢
之光武唐之中宗
天智天皇六朝敵蘇我
入鹿ヲ誅シ天下ヲ澄
玉ヲ故ニ中興ノ主ト云

公事相渡
尸方分くれの屋うありて尸也とてあ
くく地と海ひちらぐりく程すくしてに
ゆーうもくくぬ位よけりせ給ふれ
寛平元年十一月より臨時祭とす
たまふ其時乃使の平院乃大位時平公
いま志中乃とて此と先たまふけり
とらん
天智天皇御願
崇福寺拾芥下末崇福寺
六月廿四日 祓祓宿乃沖贖相も六
月乃くくくくくくくくくくくくくくく

百六十五 大神祭 上卯日

云福乃大御神乃祭なり四月小松寺
國忌 三日
天智天皇御願 沖國忌乃崇福寺にて
約より朱鳥二毛一毛なり
皇の御のら皇法御子沙母の皇孫天皇
なり御位よけり給ふく近の國乃が忌郡
大津乃文小寺くくくくくくくくくく
あり一まのふくくく國忌のふくくく
てあつたまふれを是のくくくくくくく

○江次第云今夜蓋栢
報左近衛府攝津在名
也以後地利河造定
也
稗書曰栢梨昔病中將
和氣基以攝津國栢梨
庄寄左近府以其地利
充官人以下酒賜料

綿乃事を衣もこれふりて波の
とれは小内ゆれ麓下とつひく見
とつけくおの意人御守作の意ふ
はるる事つそく名獨ありお流港に
まてこれかめる栢梨の意をうすいふ
事をもそれいたと傳存乃飲よ栢津國
栢梨庄といふあり御酒とをりて
とつて意を乃ありかめり佛名の中
をあらうと大内乃と意并りありら堪ふ
て廿二のふと志大将とつひ幼孫ふらに

○三世諸佛ノ名号一
萬三千佛名号也
○佛名經七卷 後魏北
流支 元魏天
○佛名經五卷 元魏天
善提流 支譯
○佛名經第九云仁明天皇
承和五年ヨリ佛名アリサレ
トモ百無不定十三年ニ被
定置以降用十六卷佛
名經此中所載佛菩薩
賢聖等名一萬三千餘

ふうらやうに程りてゆへに取えたる
つか也佛名乃御守作の意ふら
とれは多れども延喜乃御代とつひ御酒
ありて和琴とつひあをせ給ありとつ
也此佛名といふは三世乃流佛の名号流
唱へる根の罪と滅とれのをり御り
佛名經ふら御守作功德とつひりな
さるや實地ふら十二月よりり
義和元年毎年佛名三ヶ日乃ありは
流國にて殺生禁ありて格ふみとつ

公事原下

三十三

也然... 十六卷ノ佛名略ヲ延喜式
年三三ノ佛名經ヲ改修セシメ
遂ニ此ヲ定式トス然レモ其
師作法ヲ不改於初後必
猶萬一千佛名ト唱テ故
實トス

百九

沖鬘

下午日

花人沖々一法多門... 殿寮よびひて... 取車

百七十

五土牛童子像 大寒日

去冬... 門に小... 美福... 藻... 郁芳...

く色... たり青... 赤... 秋... 四方... 中央... 百姓... 去年... 農事...

月令... 送寒氣

○園記觀應元年荷前
停止當不及承事也

○先十三日侍リ
ケルヤト云ニ後醍醐天皇
年中行事ノ文也其下此
比あるの事也

○十陵 山階山陵天
智天皇 厩山陵光仁天
皇 栢原山陵桓武天皇

八島山陵崇道天皇
深草山陵仁明天皇
後田邑山陵光孝天皇

在仁和寺内大教院丑
寅 後山階山陵醍醐
天皇在醍醐寺北曼陀

羅堂丑寅山槐記云醍
醐北小野也 中宇治
山陵贈冷泉院母皇太

后官藤安子 後宇治
山陵贈皇太后官茂子
後宇治山陵贈皇太后

茂子鳥羽院母
○八墓 多武峰鎌足
大和國十市郡

愛宕忠仁公 葛野仲
野親王 或云高島墓

後葛野當宗氏 或云
河島墓 宇治郡宜公

小野高藤公 後小野
宣道氏 後宇治皇太

后班子 以上八墓
今宇治冷泉園融母后
合九墓

昔此御門御馬金一
イナキキテ侍キ
○此俗説也又俗説帝
登天ニ至其并ニ馬籠

ノホトリト云其籠ヲ駒
籠ト名トイハレ日本

○園記觀應元年荷前
停止當不及承事也

延喜式申務省式云
凡二月奉諸陵幣者ハ
關陽寮擇日誌即申宣

先十三日侍リケルヤト云ニ後醍醐天皇

年中行事ノ文也其下此比あるの事也

○十陵 山階山陵天智天皇 厩山陵光仁天皇

栢原山陵桓武天皇 八島山陵崇道天皇

深草山陵仁明天皇 後田邑山陵光孝天皇

在仁和寺内大教院丑寅 後山階山陵醍醐天皇

在醍醐寺北曼陀羅堂丑寅山槐記云醍醐北小野也

中宇治山陵贈冷泉院母皇太后官藤安子

後宇治山陵贈皇太后官茂子後宇治山陵贈皇太后

茂子鳥羽院母 ○八墓 多武峰鎌足

大和國十市郡 愛宕忠仁公 葛野仲

野親王 或云高島墓 後葛野當宗氏

或云河島墓 宇治郡宜公 小野高藤公

後小野宣道氏 後宇治皇太后班子

以上八墓 今宇治冷泉園融母后 合九墓

昔此御門御馬金一 イナキキテ侍キ

○此俗説也又俗説帝 登天ニ至其并ニ馬籠

ノホトリト云其籠ヲ駒籠ト名トイハレ日本

公事根原下

延喜式申務省式云
凡二月奉諸陵幣者ハ
關陽寮擇日誌即申宣

先十三日侍リケルヤト云ニ後醍醐天皇

年中行事ノ文也其下此比あるの事也

○十陵 山階山陵天智天皇 厩山陵光仁天皇

栢原山陵桓武天皇 八島山陵崇道天皇

深草山陵仁明天皇 後田邑山陵光孝天皇

在仁和寺内大教院丑寅 後山階山陵醍醐天皇

在醍醐寺北曼陀羅堂丑寅山槐記云醍醐北小野也

中宇治山陵贈冷泉院母皇太后官藤安子

後宇治山陵贈皇太后官茂子後宇治山陵贈皇太后

茂子鳥羽院母 ○八墓 多武峰鎌足

大和國十市郡 愛宕忠仁公 葛野仲

野親王 或云高島墓 後葛野當宗氏

或云河島墓 宇治郡宜公 小野高藤公

後小野宣道氏 後宇治皇太后班子

以上八墓 今宇治冷泉園融母后 合九墓

昔此御門御馬金一 イナキキテ侍キ

○此俗説也又俗説帝 登天ニ至其并ニ馬籠

ノホトリト云其籠ヲ駒籠ト名トイハレ日本

公事根原下

紀元見八天智天皇十年
九月月震疾不豫十月
疾病亦留十二月乙丑
崩于近江宮上り萬葉
集天皇智天皇不豫并
御病急朝御時太后奉
御歌上り八俗説信云三
多ク又

百三十三

内侍所神樂

雷圖抄以吉日被行之

至し初幸あり先典侍掌約まのりしとけ
らるる一人ふ本下とさくよと内侍所より
幸らりぬき、沖洋か自祝詞をく尸此方
所化人菊殿の西けしこて相れるあは
と内侍所よりし人み自殿寮慢と引く實人
懸燦をしく本末の座の切み海うけぬ
里を清の良くしはまあり人長下しと
ふよと座をり写来し座よりけく人長
とく見てもさしけれりしし如せぬと
雷圖抄詳也
本末座の口也
江次第云先唱高次名對面

採物 ○梁塵愚案採撰
物歌注下物紳以下皆
手ニトル物也

○江次第云次人長起
名亦男數人一一進奉
仕畢人長退○又云人
長起名亦男頭一人殿
上人一兩人殿上人
地下召人等各一兩其
人或至庭火前指退或
追續

○江次第云人長立庭
燦前行事次稱人人令
起才試本末皆起殿上
起人長云主殿寮御火
白仕礼又云掃部寮膝
突給次云召御琴可仕
者其人把和琴著燦突
彈之人長云候本方即
著本方座上又云召御

公事根原下

うむい海よりて次才小めとと海筆筆
争未乃方和琴乃身小むとけよ小けさ
てけうりまのり人長おやとらる小ま
ひく筆和琴乃指子不さふらら相未れひ
けりしむらつささい未おけく和琴の位
小くさる争に座のと小恙す於座とけ
あふとさくさるあひ庭火りしとさくさ
人長より入採物しとて舞神の指子あけ
て後人長よりてらるはらる其後動雪あり
かり神よりて又とらるみく舞乃あとのえ
江次第人長起舞

笛可仕者同上仰云候
 平方又云召舞葉可仕
 者同上仰云候末方又
 云召御歌可仕者同上
 仰云候本方又召一人
 同上候末方次仰云合
 天仕礼託人長退次本
 未座勸盃各三献頭以
 下取之藏人所瓶子次
 衛府召人著座次本末
 打拍子出歌先取物神
 御幣等也及舞神人長
 起舞次盃一巡如前
 訖人長起召才男頭一
 人殿上人一兩人殿上
 召人地下召人等各一
 兩其人或至庭火前指
 退或進請人長兩三歩
 進上古多後人長或又
 有奉仕散樂之者託佐

各座乃来よりすててむさゆばさく
 りりけく薦三首小前張内也まじり子三首小前張内也巖甲あか
 してゆきいほまの河まじりゆまじりさ
古の和の律鏡子末編作。
 若かりて四首三首とて約念は約と
 うお常乃こく一福と給ふ陰時乃御
 樂、秋乃来小約るれい名い陰時乃れと今
 正しきまきりしと成さるる乃取此也
 御取此るくあ秋乃いほまと取此るく
 時御着意然うこくく御着るれいこく
 福より小て作る約く色便あり陰時御

井波利次星次朝倉院
 歌欠楚駒人長起舞云
 〇二水記云才
 星吉く利く本聖
 力亦云云云云云
 云云云

神樂は福一軍つてぬまの幸殿
 へ還御る此御神ふ冬一条院乃御
 時よりよりまら福子より約つる系係
 する約るるさく入事小成りより
 春永乃乱よして内乃不西海小渡御を
 つく三季とく事ななり都へく
 とき美し時二ヶ表乃御神樂ありあり
 さと終いあして候時小約より大し神
 樂乃よりい天照太神れあ乃いしと
 してあより約し一何依神乃いより

天照大神ノミコト
 古語拾遺云喜曼鳴神
 奏爲日神行甚無狀種
 種陵海云于時天照大
 神赫怒入于天石窟閉
 馨言而幽苦焉云令天
 鈿女命以眞珠爲髮
 以薙爲手繼以竹葉
 飲龍木葉爲手草手持
 著鐸之形而於石窟戸
 前覆坐擗泉庭煥巧作
 能慶相與歌舞

公事根原下

迎鑊の河海抄紅葉賀
 除夜の御追事也鬼ヤ
 ライト云追ノ字ヲヤラ
 フトヨム也又難一字ヲ
 モ鬼ヤライモ也妙自
 禁中迄于何家打之

方相氏○周禮夏官方
 相氏掌蒙龍虎黃金四
 目古文朱蒙執戈揚旂
 帥百隸而特難以索室
 斷疫註方相猶言放用
 金鑊頭是也
 四目云云○延喜式其
 方相假面一頭黃金

されど家よと銅同命すべし此乃らうと
 何とぞしてひびけとすすきい妙
 てしるもしむ存火とたきうい
 うらうらきい事うまは我朝の風俗
 律代の縁起化よりかへんよ
百七十五 大板
 六月小町
百七十六 追鑊
百七十七 世目

考ふいけわらふむうれい大舎人寮鬼と
 けと先張湯寮考ふをきてあふのま
 小はきてと母とふい下是と妙か殿と
 んとも御般乃ちらうと推乃らあ
 夫とてつら仙龍門うらう、東庭と
 て遊に乃戸小い川こしひ沖お小灯と
 包ともは東庭廻翔鶴景盤取の、人志んさ
 了ふ灯臺と原さくさしてととんがら
 遊難とつら半年中の夜氣とつらつら
 鬼とつら方相氏の半をら四月ありて

公事帳原下

儀子トテ人。○延喜式
 儀子八人緇布衣八領
 内裏四門三十一○延喜
 式方相首親王已下隨
 次入立中庭陰陽寮雜
 祭畢親王已下執挑弓
 兼箭挑杖雜出官城四
 門上東陽明門南朱雀門
西段信門北達智門
 應永二年新撰國史七
 十四文武天皇慶雲三
 年是年天下諸國瘟疫
 百姓多死始作土牛大
 難
 ○園觀應元王記於土
 柳門殿被行追儼石兵
 兵衛督實音御行之上
 御不參云

儀子八人緇布衣八領
 内裏四門三十一○延喜
 式方相首親王已下隨
 次入立中庭陰陽寮雜
 祭畢親王已下執挑弓
 兼箭挑杖雜出官城四
 門上東陽明門南朱雀門
西段信門北達智門
 應永二年新撰國史七
 十四文武天皇慶雲三
 年是年天下諸國瘟疫
 百姓多死始作土牛大
 難
 ○園觀應元王記於土
 柳門殿被行追儼石兵
 兵衛督實音御行之上
 御不參云

寫本，與書云

應永廿九年正月十二日書之畢

偏為嬰兒也外見有憚 内大臣

一本，與書云

右根源抄依柳營御所望後成恩寺

關白兼良公于時不被見一紙之書

波書進之云云

公事限原下

書千公事根源抄集釋

公事根源抄者所以記年中公事之根源也其大意取國史諸書令人知公事大要矣先是二三子從余求講說然世本多傳寫之謬余有所考是正文字亦引據諸書以明其義名曰集釋應二三子之望頃書肆村上氏欲鑄于梓余謂註義雖不詳為幼學之助亦不為不多古曰勿以善小而為此亦小利人之善乎遂以模印云爾

元祿七年六月廿六日

松下見林書

銅駝坊書肆平樂寺村上勘兵衛壽梓

平安書林 橘枝堂藏板目錄

野田藤八

古語拾遺言餘抄	五冊	用藥須知	三冊	終身易知	五冊
神武卷集解	二冊	同後編	四冊	同世書	二冊
本朝續紹運錄	一冊	同續編	三冊	同江老老老	三冊
兼王廟陵記	二冊	廣參品	一本	萬家良人	一冊
同增補	二冊	怡顏齊介品	二冊	女要要神破	一冊
諸家八系圖	十冊	食療正要	四冊	地傳世書	一冊
本朝紹運錄	一冊	笑話出思錄	一冊	市井雜錄	三冊
正續疑孟	一冊	陶淵明全集	四冊	新書抄	一冊

為學正論 長門縣人集 二冊
訓幻字義 東洋書集 八冊
萬世周子意 心學流 一冊

古訓輯要 同 三冊
孝經頭書 新編 一冊
滕王閣 歐陽詢石刻 一冊

名義集覽 同 四冊
諸錄字義 一冊
雲慶將軍 李忠色石刻 一冊

量地指南 村岸昌著
町見系三編 三冊
管家文草 十二冊
海嶼帖 沈嘉昌石刻 一冊

京繪圖 懷中一牧摺 一冊
和歌集合小淺 本 一冊
勸善樓姓傳 五冊

同道法附 彩也 一冊
同名集 本 一冊
風俗池人氣實 本 八冊

同增補新板 右同 一冊
同治系書集 山玉源著
本 二冊
日用食心 本 一冊

秋風錄 伊東春實著
支野東南著編 一冊
同行園抄 本 一冊
仙道經緯 本 一冊

万病回春發揮 四冊
及古之序 北澤書院
本 八冊
仙道集 本 一冊

四書 正佐照 十冊
言萃集 合川了俊著
七冊
興慶妹背山 後入 五冊

古文後集 同 四冊
函齋少書全集 五冊
風流茶人氣實 日 五冊

梅花亭中指南 五冊
同初學指南抄 二冊
向不見園比保 日 五冊

同 新版 五冊
伊勢拾穗抄 二冊
風流劫進能 日 五冊

古易一家言 新井龜著
小刻一冊
年中行古歌合 二冊
俄仙人戲言日記 日 五冊

同 碑 同 一冊
將東指掌圖 一冊
江戸芝草影 日 五冊

易術便蒙 片岡如圭著
小刻一冊
堀川施書合 三冊
煙口駒之久 日 五冊

易話 同 一冊
連秋雨夜の地 宗長著
小本一冊
祿倉諸藝袖地 日 五冊

筆道如意珠 一冊
職人秋合 三冊
一目千軒齋板 一冊

三因方 陳直無著 十二冊 寺澤四季佳果一冊 同四子本一冊

新語園 了意著 十冊 同初學佳果一冊 同不求人一冊

量地指南增補 附錄 三冊 鶴泉遺稿 名加小果女性著 三冊 同新書學 一冊

同後編 近州 五冊 尺牘集要 四冊 世彥辨畧 四冊

四書 直春點 十冊 千金方藥註 松密定菴著 四冊 本艸正為 若山著 六冊

菅家萬葉集 二冊 本艸正正為 一冊 同刊治日 一冊

元亨釋書和解 惠空著 三冊 古易斷時言 新井白蟻著 四冊 茶道全書 五冊

病名彙解 六冊 周易一生記 五冊 茶雪月集 二冊

十四經和語抄 堅本冠子 五冊 易術手引艸小剌冊 東山友香合 二冊

